

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：32639

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16880

研究課題名（和文）英語教育における体系的・継続的な基本動詞の指導のあり方の研究

研究課題名（英文）Studies on systematic and continuous instruction of English basic verbs

研究代表者

森本 俊 (MORIMOTO, Shun)

玉川大学・文学部・准教授

研究者番号：40755899

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語の基本動詞をめぐる一連の調査を通して、体系的・継続的な指導のあり方を探求した。その結果、日本人学習者の多くは基本動詞の意味を日本語の訳語を通して理解する方略に縛られ、十分な「使い分け」と「使い切り」の力の獲得に至っておらず、学校現場でも体系的な指導が十分行われていない傾向が明らかとなった。指導においては、コア（核となる意味）を理解させた上で、理論に基づいてデザインされたエクササイズを通して定着を図ることが求められる。本研究の成果を現場に還元するため、基本動詞のエクササイズ集を製作した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

基本動詞を主とする基本語を使いこなす力（基本語力）は、英語力の基盤であり、機能的な英語コミュニケーションを図る上で必要不可欠である。しかしながら、これまでの英語教育における語彙学習及び指導では、語彙のサイズ（数）を増やすことに主眼が置かれており、「基本語力を身に付ける」ことの重要性は十分共有されてこなかった。本研究を通して、基本動詞の指導や習得をめぐる現状を明らかにし、その知見を現場の指導に還元することで、多くの生徒たちが基本動詞を自在に使いこなせる力を身に付ける一助としたい。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research project is to establish a framework for systematic and continuous instruction of English basic verbs. A series of investigation showed that many Japanese learners exhibited a tendency to understand the meanings of English basic verbs through their L1 translation equivalents, which resulted in their inadequate ability to use basic verbs to their full potential. In addition, it was revealed that basic verbs tend not to have been systematically taught in schools. It is argued that in order to develop learners' ability to use basic words, they need to be encouraged to focus on the core meaning of the verb and internalize it through a variety of theoretically-grounded exercises. Based on the findings of the research, an exercise book was developed for both teachers' and learners' use.

研究分野：英語教育学

キーワード：基本動詞 語彙習得 エクササイズ コア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年の英語教育において、take や give などの基本動詞や、前置詞、句動詞などを含む基本語 (basic words) を使いこなす力 (基本語力) を身に付けることの重要性が叫ばれている。基本語は日常生活に関する話題から学術的な話題まで幅広く、高頻度で用いられており、実践的な英語運用能力を身に付ける上でその習得は必要不可欠である。しかし、現状の語彙指導の多くは語彙の量 (サイズ) を増やすことに主眼が置かれており、基本語を指導する機会は限られている。そこで、本研究では基本語の中で中心的な役割を果たす基本動詞 (basic verbs) に焦点を当て、体系的・継続的な指導のあり方を探究する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の3点である。

(1) 基本動詞の学習及び指導に関する実態調査

現職の英語教員に対するアンケート調査を通して、彼らが基本動詞及びその指導に対してどのような意識 (ビリーフ) を有し、現場で実際にどのような指導を行っているのかを詳らかにし、実態把握を行う。

(2) 日本人英語学習者による基本動詞の習得研究

日本人英語学習者が英語の基本動詞をどの程度習得しているのかを実証的に調査し、習得の難易に影響を与える要因を明らかにする。

(3) 基本動詞を身に付けるためのエクササイズ・デザイン

上記(1)、(2)で得られた知見を踏まえ、基本動詞を身に付けるためのエクササイズを考案する。

3. 研究の方法

(1) 現職の英語教員を対象として、基本動詞及びその指導に関する一連の命題に対する同意度を Likert 尺度上で判定し、その理由を記述するという形式のオンライン・アンケートを実施する。

(2) 日本人大学生を対象として、基本動詞の意味及び使用に関する一連の実証研究を実施し、それぞれの動詞をどの程度習得し、その難易に影響を及ぼす要因は何であることを明らかにする。

(3) 上記(1)と(2)で得られた知見を踏まえ、学校現場で即応できるエクササイズを考案し、エクササイズ集としてまとめる。

4. 研究成果

(1) 基本動詞の学習及び指導に関する実態調査

本研究の結果から、多くの英語教員は英語学習において基本動詞を身につけることの重要性を強く認識している一方、その意味は複雑で多岐に渡り、訳語と対応させる学習法には限界を感じていることが示唆された。基本動詞の指導については、日々の授業で十分に取り扱う余裕が無いことに加え、どの学年でどの基本動詞を教えるのかについての方針が存在しない場合が大多数であることが明らかとなった。同時に、基本動詞の指導法に関する高いニーズが存在することが示された。基本動詞を使いこなす力を育成するためには、教科書や問題集で出てきた語をその都度解説するのではなく、体系的・継続的にその指導を日々の授業に組み込んでいく必要がある。様々な制約を乗り越え、これをどのように実現していくかが、今後の課題である。それと同時に、基本語の学習教材の充実や、指導法の確立などの課題にも取り組んでいく必要がある。

(2) 日本人英語学習者による基本動詞の習得研究

本項目は、一連の実証研究から構成され、日本人英語学習者が基本動詞をどの程度使い分け、使い切ることができるかを調査した。

「使い分け」の観点から実施された研究として、知覚動詞 listen/hear と look/see の研究が挙げられる (森本, 2018a)。153名の日本人大学生を対象として、上記2ペアの知覚動詞をどのように使い分けるかを日本語で記述するよう指示し、そのテキストデータを計量テキスト分析に供した。分析の結果、listen に関しては「音楽等を、意識や意思を伴って聞く (聴く) こと」、hear に関しては「音声や会話等が、意識や意思を伴わず自然に聞こえてくること」というメタ言語意識が導出された。look については、「限定された範囲のものを、意識や意思を伴って見ること」、see については「意識や意思を伴わず、対象全体が視界に入ってくる」というメタ言語意識が同定された。両ペアとも、概ねコアに合致した理解となっており、使い分けに関する一定の基準が構築されていることが示唆された。その一方、個別の記述を分析すると、使い分けにおいて必ずしも重要ではない基準が含まれているものも散見された。本研究を通して、学習者による適切な基本動詞の使い分けを促すためには、彼らが有するメタ言語意識を踏まえ、効果的な指導を行うことが必要であることが示唆された。また、基本語に関する研究において学習者が有するメタ言語意識 (metalinguistic awareness) が有益な視座を提供することが明らかとなった。

「使い分け」に関するいまひとつの研究として、Morimoto (2018b)が挙げられる。本研究では、

上記の知覚動詞の研究と同様にメタ言語意識に着目し、発話動詞 talk, say, tell, speak の使い分けについて調査を行った。153名の日本人大学生を対象として、上記4つの発話動詞をどのように使い分けるかを日本語で記述するよう求め、テキストデータを計量テキスト分析に供した。その結果、多くの学習者は talk と tell の使い分けについては正確な基準を持っている一方、speak と say の使い分けについては十分な使い分けの基準を有していない傾向が明らかとなった。talk と tell については、相手との双方向的または一方向的なやり取りかに応じて容易に使い分けられることができるが、speak と say については、speak English や say hi といったコロケーションベースの理解となっており、明確なコアを構築するには至っていないことが示唆された。したがって、それぞれのコアを明確に提示し、類似した動詞との比較を通して差別化を図る指導が求められる。

「使い切り」の視点から行ったものとして、get の構文可能性に関する研究が挙げられる (Morimoto, 2017a)。get のコアは「状態変化」であり、変化の種類 (BE 変化, HAVE 変化, DO 変化) と変化を経験する主体 (主語または目的語) によるマトリックスとして全体像を記述することができる。習熟度別3グループから成る138名の日本人大学生を対象として、get を伴う空所補充のテストを実施した。その結果、初級レベルの学習者においては、HAVE 変化が最も容易に習得され、その後 DO 変化, BE 変化という順となった。中級・上級の学習者においては、3つの変化間の有意差は無く、上級の学習者の方がより高い習得度を示した。変化の主体に関しては、初級・中級の学習者にとって、主語の変化の方が目的語の変化と比べて有意に習得が容易であり、上級の学習者はどちらの変化も同程度に習得することができていたことが明らかになった。上記の差をもたらす要因として、頻度や認知的負荷、学習方略といったものが考えられる。全体的な結論としては、多くの日本人英語学習者は、get の構文可能性を十分に実現する (= 使い切る) 水準には到達しておらず、体系的な学習が求められることが示唆された。

「使い切り」に関するいまひとつの研究として、break の意味世界に関する研究を実施した (森本, 2017b)。本研究には、英語を母語とする19名のネイティブ・スピーカー (Group 1) 及び2つの私立大学に通う日本人大学生168名が参加した。日本人学習者は、習熟度に応じて2つのグループに分けられた。参加者は、Breakability Judgment Test に回答した。このテストでは、与えられた39個の名詞に対して、それぞれがどの程度 break 可能であるかを5段階で判断するよう求めた。39個の名詞は、(1)日本語の「こわす」及び英語の break が共に使えるもの (領域 A。例: おもちゃをこわす / break a toy), (2) break を使うことができるが、「こわす」は使えないもの (領域 B。例: *約束を破る / break one's promise), (3) 「こわす」を使うことができるが、break は使えないもの (領域 C。例: お腹をこわす / *break one's stomach) という3つの領域に属しており、各領域から13個の名詞が出題された。

領域 A (+break, +こわす) については、Group 1 のスコアが Group 2, 3 と比較して有意に高く ($p < .01$, $p < .05$)、Group 2 と 3 の間には有意差が見られなかった ($p = .21$)。領域 B (+break, -こわす) については、Group 1 > Group 2 > Group 3 の順となり、各グループのスコアには有意な差が見られた (全て $p < .01$)。領域 C (-break, +こわす) については、Group 2 と 3 の間に有意差が見られなかった一方、Group 1 のスコアは他のグループと比べて有意に低い結果となった ($p < .01$)。

領域 A の名詞は、break と「こわす」が共に使用可能であるにもかかわらず、日本人学習者による容認度は低い水準であったが、習熟度が上がるにつれて容認度が高くなる傾向が見られた。領域 B については、日本人学習者は日本語の「こわす」の意味に縛られ、break を使い切れていないこと (過少汎化) が示された。領域 C については、日本人学習者は break が使われない名詞に対して break を過剰汎化する傾向があることが示された。これらの結果から、学習者による STE 方略の使用は習熟度にかかわらず強固であることが示唆され、訳語に頼る語彙学習には限界があることが明らかになった。

(3) 基本動詞を身に付けるためのエクササイズ・デザイン

上記(1)と(2)の研究を通して、基本動詞を身に付けるためのエクササイズをデザインし、エクササイズ集としてまとめた (森本俊著『コア・イメージで英語感覚を磨く! 基本語指導ガイド』, 明治図書出版, 2017年)。本プロジェクトを通して、エクササイズをデザインする上で、以下の点を踏まえることが鍵となることを示した。

多くの日本人英語学習者は、「break = こわす」のように、日本語の訳語を一対一対応させることを通して基本動詞の意味を理解しようとするため (search-translation-equivalent strategy), 先ずはこの図式を解体し、意味の広がりを目を向けさせる必要がある。具体的には、例えば、I broke my computer. (私はコンピュータを壊してしまいました), He never breaks his promises. (彼は約束を決して破りません), Her words broke my heart. (彼女の言葉で私は傷つきました) のように、少なくとも3つの用例を同時に提示し、break の核となる意味 (コア) に気づかせること (awareness-raising) が有効である。

コアを、言葉での記述 (break であれば「力を加えて、形・機能・流れをコワス」と図式 (コア・イメージ) の双方で導入し、そこから様々な語義がどのように生まれていくかを簡潔に解説し、後続するエクササイズへのレディネスを高める。

コアを意識しながら、理解 (comprehension) と産出 / 自動化 (production/automatization) のエクササイズに取り組む。前者は、当該基本動詞が用いられた様々な英文の意味を考え、コアがどのように活きているのかを考えさせるものである。後者は、日本語である状況を与え、

それを、基本動詞を使いながら英文にするという内容である。

提示する用例は、学年や習熟度に応じて調整を行う。偉人の名言や新聞記事など、オーセンティックな用例についても積極的に導入することで学習活動をより豊かなものにすることが可能となる。

尚、本研究で作成したエクササイズは一例であるため、今後実践を通して改善を行い、新たなエクササイズ論を探究することが求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Morimoto, S.	4. 巻 1
2. 論文標題 The acquisition of the constructional possibilities of 'get' by Japanese learners	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Data Science in Collaboration	6. 最初と最後の頁 115, 124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森本 俊	4. 巻 5
2. 論文標題 第二言語語彙習得研究における学習者のメタ言語意識の役割 - 知覚動詞を事例として -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JACET-KANTO Journal	6. 最初と最後の頁 19, 33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Hoshino, Naoki Sakata, Shun Morimoto, Akiko Matsukubo, Mayumi Tsubaki	4. 巻 17
2. 論文標題 The meaning distributions of a polysemous word in two kinds of EFL learning materials	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文京学院大学外国語学部紀要	6. 最初と最後の頁 35, 56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 森本俊
2. 発表標題 小学校外国語活動及び外国語における基本語の指導 - 視覚動詞の使い分けに焦点を当てて -
3. 学会等名 関東甲信越英語教育学会（KATE）第42回栃木研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shun Morimoto
2. 発表標題 A quantitative analysis of second language learners' lexical knowledge: A case of English utterance verbs
3. 学会等名 Industry-Academia Collaboration among Pure, Applied, and Commercialization Researches Based on Linguistic Data in TSUKUBA GLOBAL SCIENCE WEEK
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森本 俊
2. 発表標題 英語教員を対象とした基本動詞の学習及び指導に関する実態調査
3. 学会等名 全国英語教育学会 (JASELE) 第43回島根研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森本 俊
2. 発表標題 第二言語学習者による「訳語を対応させる方略」の使用に関する研究 - 基本動詞breakに焦点を当てて -
3. 学会等名 関東甲信越英語教育学会 (KATE) 第41回新潟研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Morimoto, S.
2. 発表標題 The acquisition of the constructional possibilities of 'get' by Japanese learners
3. 学会等名 Industry-Academia Collaboration among Pure, Applied, and Commercialization Researches Based on Linguistic Data in TSUKUBA GLOBAL SCIENCE WEEK (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森本 俊
2. 発表標題 日本人英語学習者は発話動詞の意味及び使用をどのように表象しているのか メタ言語意識に着目して -
3. 学会等名 JACETリーディング・英語語彙・英語辞書研究会合同研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森本俊、吉原学
2. 発表標題 基本語力を身につけるためのエクササイズ・デザイン
3. 学会等名 大学英語教育学会関東支部第10回記念大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 森本俊
2. 発表標題 基本語力を育むエクササイズ・デザイン
3. 学会等名 麗澤大学言語研究センター主催シンポジウム「英語辞書と英語学習」(招待講演)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 森本 俊	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明治図書出版	5. 総ページ数 151
3. 書名 中学英語サポートBOOKS コア・イメージで英語感覚を磨く！基本語指導ガイド	

1. 著者名 森本 俊・佐藤芳明	4. 発行年 2017年
2. 出版社 いいずな書店	5. 総ページ数 335
3. 書名 多文化共生時代の英語教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----